

上総国の片隅。

久留里城には里見実堯の一族が、最前線を担っていた。

真理谷氏と諍っていた頃に切り取ったこの城は、再三の返還要求に屈することなく、事実上、実堯が支配していた。

宮本城詰めも多く、とかく留守居がちな実堯を、家臣たちは十分に支えた。

一三歳になる嫡男は元服し、いまは権七郎義堯を名乗っていた。

物事を根気よく洞察し、人の知恵と力を上手に用いる父の姿に、義堯は絶大な信頼と憧れを抱いていた。また己の武芸に磨きをかけることで精一杯の若者は、のちに彼自身に課せられる里見氏の重責というものをまだ知らない。

久留里城は実堯のもと、里見家大殿である義通への揺るぎない忠孝を支える一致団結を固めていた。夷隅郡西畑地方に新田開墾を達成し、そこを笛倉村と称したのも、偏に兵糧を蓄えるためである。

このように最前線に育った義堯は、生きていくためには実を伴うことを優先とする教えを尊重していた。学問も習ったが、それは幾許かの教養を支える程度に留めていたのである。

在地の豪族を生かし、生かされること。

この調和は、これまでの里見家で必要な考えだった。

一統と協調。

義豊と義堯という従兄弟同士は、この時点でおよそ交わることのない思想の隔たりを身につけていたのであった。

その義豊の妹・美が興入れを決めたのは、佐倉の一戦ののちのことである。相手は滝田城主・一色九郎だ。義通が婿に定め、義豊が同意したことになる。

この婚姻にあたり、宮本城から実堯が臨席し、一色九郎に誼を求めた。

尾根を伝えれば、滝田城と宮本城は双方とも連立する拠点となる。

この戦略をすぐに理解した一色九郎は、実に

聡明な人物で、さすが義通の眼鏡に適う人物だと実堯は領いた。

十十十

下総の風(5)

夢酔 藤山